学校だより
３月号

やさしい子　たくましい子　考える子

黒門

発行日　令和６年３月１日
発行者　台東区立黒門小学校
校　長　石田　隆

飛び立とう　未来信じて

校長　石田　隆

花の広場の草花の芽も膨らみ、日ごとに春の息吹が感じられます。教室からは別れや感謝を伝える歌声や言葉が聞こえて来ます。時の流れを惜しみつつ、新しい出会いへの期待に胸を膨らませる3月。子供たちと成長したことを振り返り、希望へとつなげていきます。

憧れの6年生となることを意識する

今年度も校長室で、6年生と会食を行いました。私からの「黒門小の一番の思い出は？」などの問いかけをきっかけに、どの子も臆することなくおしゃべりをしてくれました。その中で、ある児童から「1年生の時にお世話をしてくれた6年生のお姉さんが活躍する姿を見て、**『私もあんな風になれたらいいな』**と憧れた。そして、それをきっかけに様々な活動に対する意欲を高めてきた。だから私も1年生が憧れる6年生になることをずっと意識してきた」という話を聞きました。黒門小のよき伝統が脈々と受け継がれていることを実感しました。

＊

小学校の学びを土台として人生を歩む

先日、45歳になる二人の私の教え子が学校に来てくれました。一人は25年前に（私が当時住んでいた）パナマにも来た子。東大進学者も多い都立高校を卒業後、スポーツトレーナー育成の専門学校に進み、現在はプロゴルファーの帯同トレーナーをしています。もう一人は高校生の息子と娘がいるお母さん。子育ての難しさをこぼしていました。何事も一生懸命にがんばる彼女の小学生時代のノート（卒業時に譲り受けたもの）を私は今も大切に持っています。話を交わしているうちに30数年前にあっという間に引き戻されたようでした。

また、黒門小学校の卒業生が、令和4，5年度と2年続けて教育実習に来てくれたことも嬉しいことでした。二人とも私が副校長だった時の児童でしたが、今の子供たちに「○○先生！」と呼ばれて親しまれていたのがなんとも不思議というか、微笑ましい光景でした。

＊

希望の風に乗り　夢を託して

私達教職員は、多くの子供たちと出会いますが、卒業後に一人一人がどのような人生を歩んでいるかを知ることは限られます。しかし、「あの子たちはどうしているだろう」と、ふとした時に思い出します。また、たとえ直接かかわっていなくとも、「50年前に、70年前に…卒業しました」という同窓生が来校され、お話を伺う機会を得ることも嬉しいことです。

巣立った子供たち、そして今月卒業する64名の子供たちには、**自分の思いを大切に、希望をもって生活をしていること・いくことを願う**とともに、いつか、**大切な仲間と巡り会えたこの場所、黒門小学校を訪れて、懐かしんでまた前を向いて歩んで行って欲しい**と思います。

＊＊＊

今年度も黒門小に関係する皆様の力をお借りして、「Well-Beingの実現」を目指して参りました。ご理解・ご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。